

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 19 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530666

研究課題名（和文） 将来の感情予期及び現在の感情と自動的・制御的行動との相互作用モデル構成の研究

研究課題名（英文） Research on the construction of interactional model of future/current affect and automatic/controlled behavior.

研究代表者

北村 英哉（KITAMURA HIDEYA）

東洋大学・社会学部・教授

研究者番号：70234284

研究成果の概要（和文）：人は意識的に気をつけて行動する場合と、意識しないで自動的に行動を行う場合がある。これを2つのモードとすれば、そのときの感情状態によって、いずれのモードをとるかの選択に影響が現れる。さらに、本研究では、現在の感情に加え、将来感じられると予期される感情予期の影響を取り上げ、現在の感情と未来の感情の双方がモード選択に影響することを示した。これらを社会的に重要な3つの場面－感情制御、偏見、学習の自己制御－において検討し、特に自己制御では将来の感情予期の影響が大きいことを見出した。

研究成果の概要（英文）： We have two ways of thinking and action. One is an automatic strategy and another is a controlled processing strategy. Affect has an impact on the selection of these modes, and I have executed three experiments, adding the condition of affective forecast other than current feeling. The results implied that both current affect and future affect had an influence on the strategies. I investigated these effects in three important daily situations, affect regulation, prejudice, and self-regulation of learning, finding that future affect took an especially important role in the situation of self-regulation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
21年度	1,200,000	360,000	1,560,000
22年度	600,000	180,000	780,000
23年度	600,000	180,000	780,000
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：感情、気分、情報処理方略、ステレオタイプ、偏見、自動的行動、制御的行動、自己制御

1. 研究開始当初の背景

人の社会的情報処理の仕方には、2種類の

ものがあるという指摘が二過程モデルの観点からなされてきた（Chaiken, 2001）。自動的、非意識的に迅速に処理が進み、対応する

反応や行動が現れる「自動的処理 (automatic processing)」と「制御的処理 (controlled processing)」という区分もその1つである。さらに、感情との対応では、ポジティブ感情時に自動的処理、ネガティブ感情時に制御的処理が促進されるという見解が広がっている (Schwarz, 1990; 北村, 2002)。

また、社会心理学においても自己制御 (Self-regulation) の研究が進展し、ダイエットや学習などのさまざまな日常的応用場面において、いかに人が適応的な制御をなし得るかという問題意識の下、そのプロセスが検討されている。自己制御は、食行動や遊びのように、自我枯渇が生じた際など、ついつい自動的な行動として、短期的な魅力につられ、長期的には損失があるような行動に従事してしまい、適応的な制御のためには、制御資源が必要であることが主張されている。

楽観的な態度は、自動的な反応に身を任すことを赦してしまい、より警戒的で心配を保持することによって、そのネガティブ感情は制御的反応・行動を促進する。

しかし、自己制御は未来に渡る行動の計画や調整に関わることであるので、「現在の感情」の影響だけでなく、「将来の感情」の予期も大きな役割を果たすと考えられる。

失敗を予期することに伴う不安や心配によって、安全策がとられ、自己制御を課するという動機づけが高まる場合がある。また、予期感情を扱うと、実際の感情よりも大きく見積もるインパクトバイアスが指摘されており、より大きな効果を後悔やネガティブ感情を予期して、それが適切な現在の自己制御につながるという道筋が考えられる。

本研究計画では、さまざまな場面における自己制御—感情の制御、ステレオタイプの制御、学習行動の制御をとりあげ、現在の感情あるいは将来の感情予期が、選択、利用する情報処理方略にいかに影響するかを調べていく。

2. 研究の目的

自己制御は多岐にわたる生活場面が想定され得る。社会心理学的に取り上げられ、重要なものが3点あると考える。

(1) 第1に、近年、感情の社会心理学研究が増加しているが、その1つに感情制御の問題があり、行動の制御と感情の制御の間の関係性が問われている。ある行動を持続させるには、それに耐えうる感情状態 (がまん、やる気など) が重要であり、退屈したり、飽きたりする気分状態が、その時点での課題遂行の停止に関わる。一方、将来の感情予期という観点から指摘すると、将来のネガティブな結果とネガティブな感情を予期する心配状

態が、十分な準備と課題遂行を (試験の対策のように) 促進することも指摘されている。つまり、感情の意味をどのようにとらえるかの条件によって、課題を停止したり、持続させたりする課題のストップ・ルールとして気分が機能するという考え方を研究1で検証する。

(2) 第2に、社会心理学で重要なテーマであり、またネガティブな感情制御の一例でもある偏見の制御という問題がある。気分と偏見制御の関係には諸説があるので、本プロジェクトは有意味な検討を行うために、より実際の現実場面に近いような状況をパソコンプログラミングゲームの開発を行って用意し、ゲームを通じた差別行動を測定することによって検討する。

(3) 第3に、社会的・教育的に重要な学習場面を取り上げ、継続的、持続的に課題遂行を行っていくに際して、いかなる認知的方略が用いられ、それが現在の感情や予期感情とどのように関係するかを検討する。

以上の検討によって、感情と情報処理方略、自動的/制御的行動との関連をより一般化した水準で取り上げて、検証を行うことを目的とする。以下、各下位目的に即した方法と結果、考察を目的 (1)、(2)、(3) に対応させて順に記していく。

3. 研究の方法

(1) 実験参加者 大学生73名 (男性19人、女性54人)。気分 (ポジティブ・ネガティブ) ×ストップ・ルール (十分条件・楽しみ条件・気分変化条件) の2要因計画

課題遂行を終了するストップルールとしては、十分条件: 「もう十分やったと思ったら、スペースキーを押してゲームをやめてください」、楽しみ条件: 「ゲームがつまらなくなったら、スペースキーを押してゲームをやめてください」、気分変化条件: 「あなたの気分がゲームをする前と変わってしまったら、スペースキーを押してゲームをやめてください」の3種類を設けた。

手続き 最初に気分誘導の課題をパソコンを通して行い、参加者にはディスプレイ中央に注視点が出た後に、画像が左右いずれか表示された位置に対応したキーを押すように教示し、最初に練習の10枚のニュートラル画像に引き続き、本試行としてポジティブ気分/ネガティブ気分それぞれの条件に対応した異なる画像24枚が

提示された。その後2種類の感情尺度に回答し、次のゲーム課題を行った。ゲームを行う前に説明書を提示し、その際ストップ・ルールについての教示を含めた。ゲーム終了直後に再び感情尺度に回答し、終了後、デブリーフィングを行った。

(2) 実験参加者 大学生74名。
 発言の効果、音楽(BGM)による気分の効果を見るために、発言(ポジティブ/ネガティブ)×音楽(ポジティブ/ネガティブ)の2要因計画によって個人実験を行った。手続き 実験参加者は、8つのシーンをコンピュータ・ゲームとして呈示されて、自分の着席位置を決定した(教室、図書館、電車内、レストラン、酒場など)。うち、6つのシーンにおいて、西アジア系外国人と西欧系外国人と日本人が画面のなかにいた。実験参加者はマウス操作でポインタをあてることによって、そこにいる人物の思考、発言あるいはプロフィール(日本人の場合)を見ることができた。

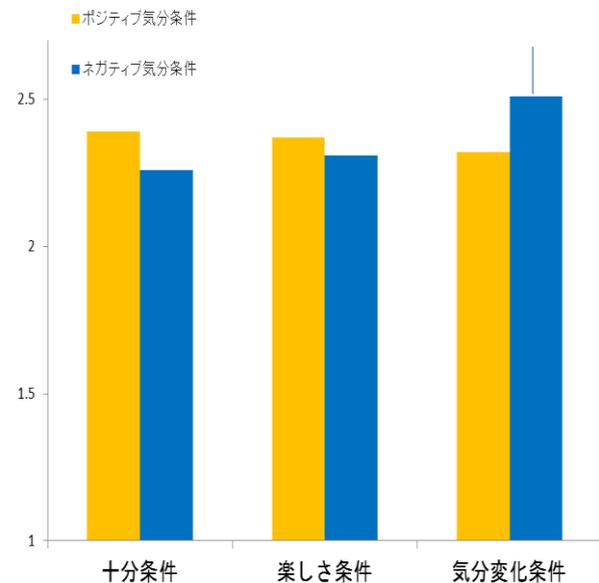
(3) 調査参加者 26名
 手続き 課題への取り組みについて、2週間のモバイル調査とその前後における質問紙調査によってデータを収集した。2週間後にレポートを提出することを説明し、最初に、いつから準備を始めるか、いつレポート作成に取りかかり、完成時期の予測を尋ね、うまくいった場合の感情、うまくいかなかった場合の感情予測を0-10点の11点尺度で回答してもらった(分析では、課題完了後の実際感情と比較するために、1-4点に変換)。
 さらに、翌日から2週間、携帯で指定されたWebサイトにアクセスし、そこで、この目標達成に役立つ制御方略についての質問項目(小林, 2011)に回答し、そのときの感情、どれだけ達成できたかを毎日回答した。最終日には、レポートを提出したか、完成した期日、とりかかった期日を回答させ、達成感、満足感、落胆、罪悪感などの最終的な感情についても1-4点の4点尺度で回答を求めた。

4. 研究成果

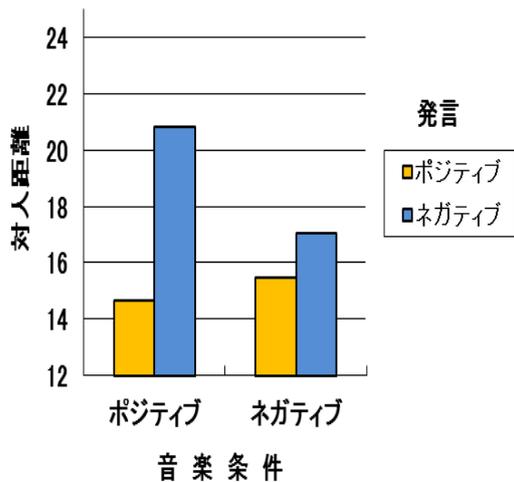
(1) 尺度の回答に不備があった3人とゲーム課題のエラー数が顕著に多かった1人のデータを除外し、69名を対象に分析を行った。

課題遂行時間に対する2要因分散分析の結果、交互作用のみが有意であった($F(2, 63) = 3.54, p < .05$)。単純主効果検定を行ったところ、ネガティブ気分条件で教示の効果

が有意で($F(2, 31) = 4.54, p < .05$)、また、気分変化条件で気分の効果が有意であり($F(1, 21) = 4.98, p < .04$)、ネガティブ気分条件がポジティブ気分条件よりも長く課題を行っていた(下図)。気分変化条件において、ネガティブ気分の者の方が、より慎重に課題に取り組むことが示された。



(2) 着席決定した位置と西アジア系外国人の位置との距離を点数化し、値が大きいほど、距離を大きく取って着席位置を決めたことを示す偏見的行動の指標を作成した。ポジティブ感情群では、偏見的行動は両極化し、ターゲット人物が好意的発言をしている場合には、相対的に距離が近く、否定的発言をしている場合には、距離を遠くにとる選択が見られた。気分と発言の交互作用が有意であり($F(1, 70) = 38.21, p < .001$)、ネガティブ気分群では、それほど発言による差は大きくなかった。ポジティブ気分時の方が、外国人に対する対応、空間行動がヒューリスティック的に単純化、両極化する傾向が確認され、ネガティブ気分時には、相対的によりシステマティックな対応がとられることが確認され、仮説は支持された(下図)。また、このような効果は西アジア風ターゲット人物においてのみ有意であり、西欧人では効果が見られなかった。とりわけ空間行動から見られる偏見的行動は西欧人よりも西アジア、イスラム系人物に対しての方が強く表れることが示された。



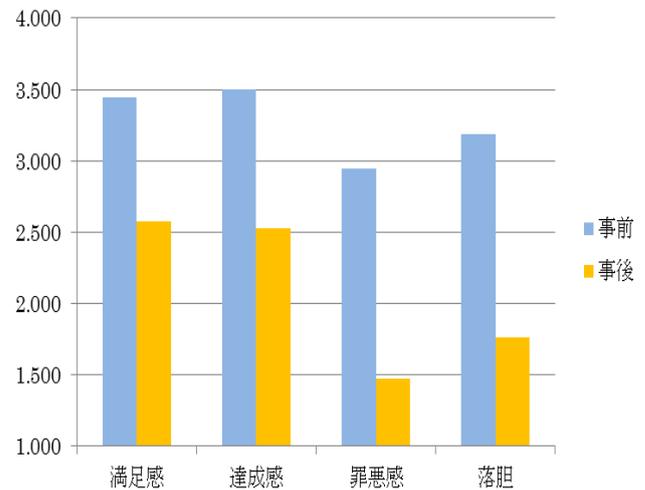
(3) 目標達成のための制御方略には、目標の再確認を行う意識的方略(意味確認方略)と気分転換を図るより簡便でヒューリスティックな方略が含まれ、また、目標阻害要因(誘惑)から注意をそらすようないくぶんヒューリスティックな方略に分類された。予測感情 満足感では、気分転換方略、誘惑回避方略のヒューリスティック方略と有意な相関が見られた($r=.461, 455, p<.05$)。目標実行方略とも相関が見られた($r=.434, p<.05$)。予測の嬉しさは、誘惑回避方略と有意な相関が得られた($r=.396, p<.05$)。また、達成感では、満足感と類似して、気分転換方略、誘惑回避方略のヒューリスティック方略とそれぞれ有意、ないし相関の傾向が見られた($r=.591, p<.01; r=.378, p<.10$)。ネガティブな感情においては、悲しさの予測が高いほど、目標の再確認という意識的なシステムティック方略の採用が高く($r=.493, p<.05$)、同時にヒューリスティック方略とも相関が見られた(気分転換 $r=.475, p<.05$; 誘惑回避 $r=.493, p<.05$)。

一方、モバイル調査によるその時点での感情は、選択する制御方略と関連は見られなかった。したがって、現在感情よりも学習の自己制御においては、将来の成功・失敗の予測にまつわる予期感情の方が方略選択への影響が大きいことがわかった。

また、事前に予測した感情の強度と、課題終了後の実際の感情を比較すると下図のように、インパクトバイアスが見られ($F(1, 20) = 104.66, p<.001$)、事前に予測した感情の方が、実際の感情よりも強い傾向がいずれの種類の感情においても観察された。

この結果、予期感情というものが、制御方略に関係しているということが新たな知見

として判明し、その効果はリアルタイムの現在感情よりも強い、また、予期感情のポジティブ度が強い場合にヒューリスティックな制御方略を促進し、ネガティブな場合には、ポジティブ感情と比べ相対的によりシステムティックな制御方略を採用しがちであることがわかった。



以上、総合的に成果を考察すると、本研究では、従来の現在感情だけではなく、将来の感情予測である予期感情を新たにモデルに取り入れることによって、両方の感情がそれぞれ自動的/制御的方略に関与すること、また、学習場面などの自己制御においては、予期感情の影響が強いことを新たに見出した。これは、従来にはなかった知見であり、本プロジェクトを進めることによって初めて見出された知見と評価できる。

さらに、制御的な日常場面を、感情、偏見、学習と重要な場面を広くとることによって、さまざまな場面における制御方略に感情が影響することを確認し、一般化に資することができた。なかでも、偏見に対する影響の検討では、偏見的行動を測定する新たなツールであるゲーム・プログラミングを本科研費補助金によって作成することができ、偏見、ステレオタイプ研究に役立つ潜在測定を一步進めることができた。

これらの成果は国内の学会にて発表された他、次年度の海外の学会においても発表予定であり、また、成果として、刊行物が4点あるなかで、重要な理論的研究を執筆、公刊することができた。とりわけ有斐閣の書籍では、執筆したうちの3章において、本研究と関連する非意識過程、二過程モデル、感情というテーマで著すことができ、また、誠信書房の書籍においても、潜在測定を大きくとりあげた章を執筆することができ、二過程モデ

ルと潜在測定¹の日本における紹介、理解の促進、研究の進展に寄与を行うことができた。
引き続き、この成果を生かしていく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計4件)

- ① 北村英哉、差別行動に影響する感情的要因について、日本社会心理学会第52回大会、2011年9月19日、名古屋大学
- ② 小林麻衣・北村英哉、自己統制の個人差が誘惑・目標活性化に及ぼす影響、日本社会心理学会第51回大会、2010年9月18日、広島大学
- ③ 佐藤重隆・北村英哉、気分状態と課題のストップ・ルールが課題遂行の持続に及ぼす影響、日本社会心理学会・日本グループ・ダイナミックス学会合同大会、2009年10月11日、大阪大学

[図書] (計4件)

- ① 北村英哉・大坪庸介、有斐閣、進化と感情から解き明かす社会心理学、2012年、総頁278
- ② 浦光博・北村英哉、誠信書房、展望 現代の社会心理学第1巻、2010年、113-148
- ③ 村田光二 (編)、北大路書房、現代の認知心理学6 社会と感情、2010年、175-194
- ④ 海保博之・松原望 (監修) 竹村和久・北村英哉・住吉チカ (編)、朝倉書店、感情と思考の科学辞典、2010年、総頁472

6. 研究組織

(1) 研究代表者

北村 英哉 (KITAMURA HIDEYA)
東洋大学・社会学部・教授
研究者番号：70234284

(2) 研究分担者 (0)

(3) 連携研究者 (0)

(4) 研究協力者

佐藤 重隆 (SATO SHIGETAKA)
東洋大学大学院・社会学研究科・大学院博士後期課程

小林 麻衣 (KOBAYASHI MAI)
東洋大学大学院・社会学研究科・大学院博士後期課程